

冬霜

思ふより又もあはれはかさねけり露にまもをく庭のよもぎふ

此歌左方申云つゆにまもをく如何右陳云つゆまもといふはつゆに霜のおきくするなり

又難云露霜は露と霜とのともにをくにこそ露の上に霜をかむこと如何判者俊成卿云霜

は露の結にこそ侍めれと云々

〔萬葉集一〕志貴皇子御作歌

華邊行鴨之羽我比爾霜零而寒暮家之所念

〔萬葉集十〕詠霜

天飛也鴈之翅乃覆羽之何處漏香霜之零異牟

〔古今和歌六帖一〕霜

木の葉みなからくれなゐにくゝるとて霜の跡にもおきまさるかな

〔枕草子三〕草の花は略〇中 りんだうは枝ざしなどもむづかしげなれどこと花みな霜がれはて

たるにいと花やかなる色あひにてさし出たるいとをかし

光俊

〔新撰六帖一〕まも 谷ふかき岩やにたてる霜ばしらたが冬こもる栖なるらん

〔八雲御抄三上〕霜略〇中 万八霜雪もいまだすぎぬにむめのはなみつといへりこれは春霜也

後撰にまもをかぬ春よりのちといへり たゞし春も少々詠す

〔日本書紀二〕三十四年三月寒以霜降

〔日本書紀皇極〕二年三月乙亥霜傷草木華葉

〔夫木和歌抄五〕正嘉二年毎日一首中

民部卿爲家